

月刊

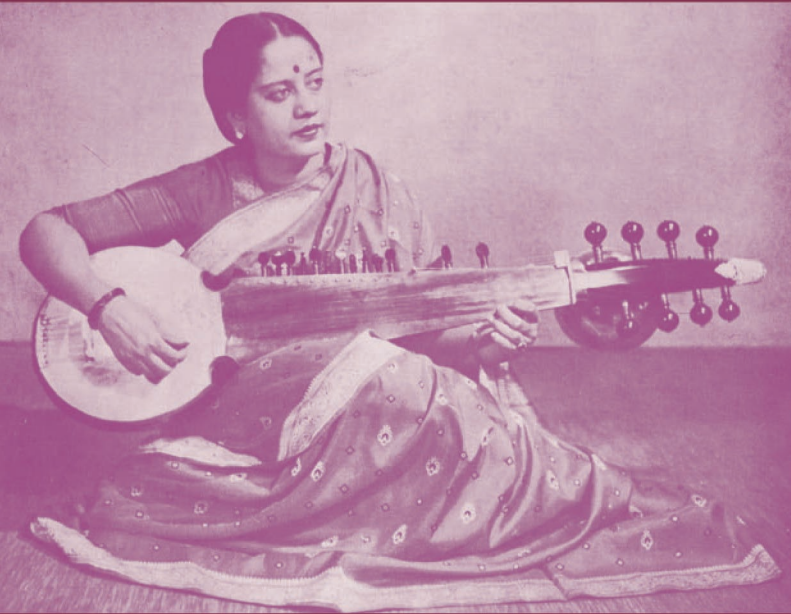
2019

2  
月号

# みんぱく

特集

## 南アジア、 弦の響き



遥かなる弦楽器の旅 寺田吉孝  
インドの弦楽器サロードとの出会い 田森雅一  
インドネシアのルバップ 福岡正太  
シタールを日本で使うということ 小日向英俊  
イランの弦楽器 サントウール 谷正人  
トルコでサズを奏でる日々 米山知子  
南インドのゴットウヴァーティヤム 寺田吉孝

# 定住と放浪

岡崎 武志

プロフィール  
1957年大阪府生まれ。書評家。立命館大学卒業後、高校の国語講師となる。その後、出版社勤務を経て、現在は書評を中心に各紙に執筆するフリーライターとして活躍している。『女子の古本屋』（筑摩書房）人と会うカ（新潮社）、『古本通入門』（中央公論新社）など著書多数。

この秋、雨の日、林芙美子記念館（新宿区）を訪ねてきた。林にとつての終の住処をそのまま記念館としている。坂の途中の瀟洒な日本家屋である。代表作放浪記に象徴されるように、林は出生からまさに「放浪」の生涯で、住居を転々とし、現・上落合から中井町周辺で二度目の転居の末、「定住」場所を見つけた。天性の「放浪」者であったはずの林が建てた「定住」の家が、じつに趣味のいい、落ちついたものであったのは意外だった。しかし、「定住」は林に似合わなかったのか、一〇年ほど住んで、あの世に旅立った。

私も転居の多い人生で、数えてみたら生まれてから今までに少なくとも二五回は引越しをしている。上京してからも四回目。東京西郊の一軒家に居を構えたのが二五年前。おそろしくここが終焉の地となるだろう。ところが面白いことに、「定住」が約束されてから、山頭火や井月など漂泊の俳人「男はつらいよ」の寅さんに興味を持つようになった。宮本常一を読み始めたのも同時期である。「定住」と「放浪」は、天秤計りに掛けたように、どちらかに比重が傾くと、大きくバランスを崩し、反対を重くしたくなるらしい。しかし、もう「放浪」はできない。そこで、無性に旅の空に生きる人に憧れるらしい。

日本では、菅江真澄、柳田国男、宮本常一など、旅することと学問の端緒を見つけ、人生の立ち位置を見つけてきた人もじつに多い。「旅にでて、自分の生活と

は異なる世界に身をおき、さまざまなことを発見する。民俗の発見もその一つである。近世の民俗の発見は旅から始まった」と、先述の人たちを論じた『日本民俗学の開拓者たち』で福田アジオが書いている。周知の通り、柳田は一九〇八年夏に九州を長く旅し、一月には佐々木喜善と出会い遠野の不思議な話を聞き取る。「定住」からは生まれぬ知識と発想であった。

しかし、芭蕉に始まって、その異端の弟子・路通、山頭火、井月、牧水と放浪の詩人を並べても、「放浪」しつぱなしということはなく、折々に故郷へ戻ったり、知人の家に長期間厄介になるなど、「定住」の匂いを残している。山頭火は家庭を持つがそれを捨て、出家得度の末、一鉢一笠の旅に出る。放浪の途中、知人の家を訪ね歩き、ときに無心をし、人臭さが消えることはなかった。一九二九年には妻が営む額縁店「雅楽多」に一旦腰を落ち着けるも再び家を出る。「定住」は長続きせず、ふらふらと「分け入つても分け入つても青い山」の野をさすらうことになるのだ。

「男はつらいよ」の寅さんは、喉嚨売で日本中を旅するが、故郷の葛飾柴又には「定住」する優しい妹のさくらがいつも待っている。お盆時期や正月になるとどこからともなく現れる寅さんは聖性を帯び、折口信夫のいう「まればと」のように見える。「定住」する者にとつて「放浪」は人生の味だが、ときに寅さんそれはずるいよと思つのである。

- 10 ○○してみました世界のフィールド  
日本で唯一のユニバーサルシアター  
飯泉 菜穂子
- 12 みんなく Information
- 14 想像界の生物相  
龍に生まれ変わる  
信田 敏宏
- 16 新世紀ミュージアム  
地中美術館  
三島 禎子
- 18 シネ倶楽部 M  
サーミの歌、ヨイクをめぐる心の旅  
——「受け継ぐ人々」  
川瀬 慈
- 20 ながなんちゃ  
トナカイのロメさん  
大石 侑香
- 21 次号予告・編集後記

- 1 エッセイ 千字文  
定住と放浪  
岡崎 武志
- 2 特集 南アジア、弦の響き
- 3 遙かなる弦楽器の旅  
寺田 吉孝
- 4 インドの弦楽器サロードとの出会い  
田森 雅一
- 5 インドネシアのルバップ  
福岡 正太
- 6 シタールを日本で使うということ  
小日向 英俊
- 7 イランの弦楽器 サントウル  
谷 正人
- 8 トルコでサズを奏でる日々  
米山 知子
- 9 南インドのゴットウヴァーティヤム  
寺田 吉孝

月刊  
みんなく

2月号目次

特集

# 南アジア、弦の響き

南アジアに伝わる弦楽器は、個性あふれる音色や外形で人びとを魅了してきたが、日本ではまだまだあまり知られていない。本特集では、楽器の演奏や研究に長年従事してきた企画展実行委員が楽器との出会いや思い出を語り、その魅力を伝える。

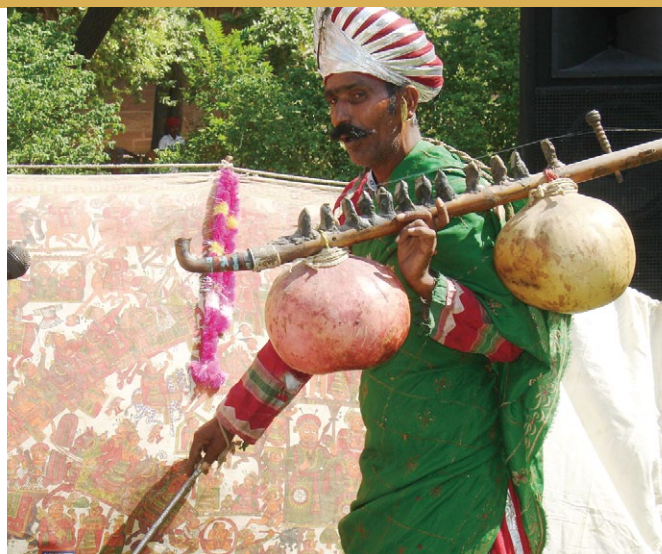
## 遙かなる弦楽器の旅

寺田 吉孝 民博 学術資源研究開発センター

### 【企画展】 旅する楽器

——南アジア、弦の響き

会期：二月二日（木）—五月七日（火）  
場所：本館企画展示場



ジャンタルとよばれる撥弦ツィターを伴奏に絵解きをする楽師  
(ラージャスターン州パリーー県、2007年、提供：Vinod Joshi, Jaipur Virasat Foundation)

弦楽器と歴史的につながりがあるという説が有力だ。

### 企画展「旅する楽器」

南アジアで演奏されるさまざまな弦楽器はいつごろ、どのような経路で南アジアに紹介され、どのように改良され、定着したのだろうか。このような楽器の旅路と来歴を紹介するために、企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」を開催する。展示では、弦楽器を演奏法により、指やピックなどで弦をはじいて音を出す撥弦楽器、弓で弦をこする擦弦楽器、軽い木などでできたバチで弦を叩く打弦楽器の三種に分類する。特に種類の多い撥弦楽器は、シタール系、タンブラー系、サロドー系、ヴィーナー系の四系統にわけて紹介する。

### 南アジア特有の弦

楽器の展示では楽器全体の形に目が向いてしまいがちだが、弦楽器の肝である弦そのものにも注目してほしい。特に、南アジアの弦楽器には、他の地域ではあまり見られない機能をもつ弦が張られており大きな特徴となっている。ここでは二種類の弦について簡単に紹介したい。第一は共鳴弦で、文字通り他の弦で演奏される音に共鳴して振動する弦のことである。したがって、直接はじいたり弓で弾いたりしない。演奏される音ひとつにつき一本の共鳴弦が必要。そのため、三〇本以上の共鳴弦を張る楽器もある。音の高さが変わるにつれて、異なる共鳴弦が振動してその音を増幅する。旋律弦では音を変えらるために異なるポジションを押さえるため、直前に演奏した音はすぐに消えてしまうが、共鳴弦は少しのあいだ鳴り続ける。これらの残響が重なり合って陰影に富んだ響きになる。現在演奏されているシタールの特徴的な音は、この共鳴弦の存在に負うところが大きい。共鳴弦がつけられたのは一九世紀の後半であると考えられている。今回の企画展では、新旧のモデルを



共鳴弦がない古い型のシタール。6ページ下に、現在使われている共鳴弦付きのシタールが掲載されているので見比べてほしい(H0278818)

合わせて展示するので見比べていただきたい。もうひとつは、旋律を演奏しながら、演奏のリズムの側面を示すためにはじくリズム弦（チカーリー弦）である。リズム弦は、指ではじく撥弦楽器に限られ、擦弦楽器には存在しない。リズム弦は音階の核になるサとパの音（基音と五度上の音、および一オクターブ上のサの音に調弦されることが多い。定期的に同じ音が演奏されるため、音響の枠組みを継続的に示す一種の持続音の役割も兼ねている。

### タゴール家と楽器

今回の企画展の目玉のひとつに、一九世紀後半にインドから日本に「旅した」楽器がある。北インドの古典音楽のバトロンとして、その発展に大きく寄与したタゴール家は、インド東部ベンガル州の名家であり、文化人を数多く輩出してきた。この一族の出身で音楽学者のS・M・タゴールはインド音楽を紹介するために、世界各地にインドの楽器や音楽書を寄贈した。この活動の一環として一八七七年に三点の楽器が日本の皇室に寄贈されたのである。現在これらの楽器は東京国立博物館に収蔵されており、今回展示す

るのはそのうち弦楽器二点であるが、これまでもほとんど公開されてこなかった。ひとつはキンナリ・ヴィーナーとよばれる撥弦リニュートである。通常、木かぶくべ（ヒョウタン）で作られる共鳴胴がダチヨウの卵の殻で作られており、棹の前面に模様のある布が張られている点とともに、非常にめずらしい。もう一点の擦弦楽器サーランギーも楽器全体に彩色が施されている。演奏に耐えうる構造をもつが、通常では見えない箇所にも模様を施されており、職人魂が感じられる一品である。次ページ以降、企画展実行委員六名が、それぞれ特別な思いのある楽器を一点ずつ選んで紹介する。なお、それぞれの楽器群についてのより詳しい情報は、『季刊民族学』（二六六号、二〇一八年一〇月刊）の特集「旅する楽器」をご覧ください。



インド西部ラージャスターン州の撥弦楽器サーランギー  
(撮影：Daniel M. Neuman, 1989年)

異なる文化との遭遇が、その後の人生に大きな影響を与えることがある。わたしの場合、たまたまそれが南アジア世界であり、北インド古典音楽だったのだろう。大学に入り演劇をかじりはじめた一九八〇年の春休み。カルカッタ(現コルカタ)を起点にマドラス(現チェンナイ)、ボンベイ(現ムンバイ)、デリーを約一カ月で一周する貧乏旅行に出かけた。そこでのカルチャーショックは大きかった。フランスの詩人アンリ・ミシヨールは「インドには見るべきものはなく、すべてが解釈すべきもの」と詩的に表現したが、感じる以外に解釈を可能にする術はもち合わせ



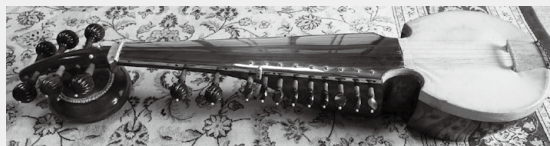
上：サロードとタブラの演奏(右が筆者、1995年)  
下：筆者の師匠カリヤン・ムケルジー教授(1943-2010)

ていなかった。そして、音楽や人との出会いをとおして、やがて彼の地が愛憎入り交じる第二の故郷となった。バザールのスピーカーから流れる甲高い女性の歌声、大道楽師が操る太鼓の唸るような低音の響き、耳に残る倍音や共鳴音……。異文化世界で聴くそれらの音色はとても魅惑的だった。やがてサロードという撥弦楽器に魅せられ、音楽修行のために渡印した。一九八七年のことである。師匠の家に住み込んで音楽を学び、その体験を『インド音楽との対話』(一九九〇年・青弓社)にまとめたが、その過程で方向性の少し異なる二つの興味が芽生えた。

一つは、サロードなど弦楽器の起源・伝播・変容に関する音楽民族学的なもの。もう一つは、音楽演奏を生業とする人びとの社会組織や口頭伝承に関する文化人類学的な関心である。前者は、アジアに広く分布する撥弦楽器の地理的連続性と音楽文化的差異の問題へと向かい、サロードの類縁楽器を求めて旅した経験を『幻の楽器を求めて』(一九九五年・筑摩書房)という一般書にまとめた。また、後者はサロードを演奏する人びとの流派やカーストについてフィールドワークを重ね、『近代インドに

おける古典音楽の社会的世界とその変容』(二〇一五年・三元社)という専門書にまとめた。今回の民博での企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」への参画は、楽器の移動と変化する過程をとおして音楽文化を再考する旅路となった。楽器は元の機能美と様式美を維持しつつ、演奏される文化のなかであらたな命を吹き込まれ、姿形を変える。楽器もまた人類文化の共通点と多様性のあり方を問いかけてくる。

サロード (筆者蔵)



サロードは全長1~1.2メートルの撥弦楽器。主弦4本の他に共鳴弦等が十数本張られている。共鳴胴には皮革が、広い棹には金属製指板(指で弦を押さえる部分)が装着されフレットがないのが特徴的である。

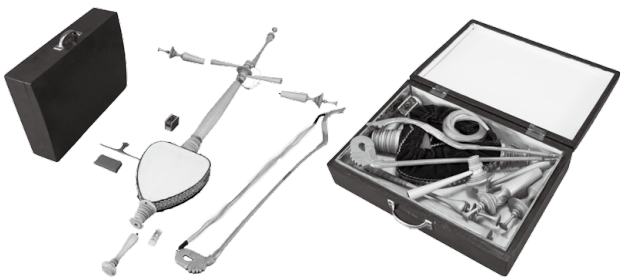
## インドネシアのルバツプ

インドネシア、ジャワ島のガムランは、ゴングや鉄琴をはじめ、多様な楽器を用いるアンサンブルである。王宮で発達した大規模なガムランは、大きな音がする野外楽的なアンサンブルと柔らかな音がする室内楽的なアンサンブルという、対照的な性格をもつ音楽を吸収して成立した。曲の種類により、あるいはひとつのパフォーマンスのなかでも、異なる色合いをあらわすのがガムランのおもしろさである。

柔らかな音のするアンサンブルのなかで中心的な役割を果たす楽器のひとつがルバツプだ。弦を弓でこすって演奏する楽器である。ジャワ島中部のガムランでは、事前の打ち合わせなしに、複数の曲を続けて演奏することも多い。ルバツプ



ルバツプを演奏する音楽家K.P.H.ノトプロジョ(1950年ころ)  
[Attribution: Tropenmuseum, part of the National Museum of World Cultures (CC BY-SA3.0)]



スンダ人の組み立て式ルバツプ

は、メロディを導くリーダー的な役割を果たしており、演奏者はみな、ルバツプが次にどのようなメロディを奏するかを聴き、どの曲に移っていくかを知り、ついていく。ルバツプはガムランのレパートリーを良く知り、上手に他の演奏者を導いていく

ことのできる音楽家でないといつとまらない。わたしは日本でガムランに出会ったのをきっかけとして、ジャワ島西部に住むスンダ人の音楽を研究するようになった。最初に出会ったのがジャワ島中部・東部に住むジャワ人の音楽だったため、西ジャワを訪れるようになったころ、ジャワ人とスンダ人の音楽や楽器の違いが新鮮に目に映った。そのひとつが両者のルバツプの違いである。

福岡 正太 民博 人類基礎理論研究部

特におもしろいと思ったのは、スンダ人の組み立て式のルバツプだった。ルバツプは横に細くびた糸巻きをもち、胴にはうすい皮がはられている。雑に扱えばすぐ壊れてしまう繊細な楽器である。スンダ人はこれをバラバラにして小型のアクセサリー等にしてしまっただけでなく、持ち運べるようにしていた。わたしの印象では、ジャワのルバツプは思索を深めていくような洗練された響きをもつ。に対し、スンダ人のルバツプは華やかにメロディを奏でる。スンダ人のある種のくつたくなさが、このような工夫を可能にしたのかもしれない。

ルバツプ (H0149092)



逆三角形の胴に長めの棹と脚をとり付けた擦弦楽器。西アジアのラバブに由来する。同種の楽器にマレーシアのルバツプやタイのソー・サーム・サーイなどがあり、胴の形に特徴がある。

の表面を定期的に削り直して、弦との隙間を調整することが必要になる。インドにいれば、このジャワリーリの調整は職人へ簡単に頼めるが、シタール職人は日本にはいない。旅をして日本にやってきたシタールは、筆者が調整のやり方を学んでおこなっている。ただ、こうした保守の方法を学んで、アフターサービスを提供しようとする民族楽器店もあらわれ始めたようだ。旅する楽器がいい音を出し続けるには、楽器の保守技術も旅してやる必要がある。



アーチ形の金属フレットと、棹の上部で弦を支える上駒(かみごま)

一九七〇年代後半の東京で巨匠ラヴィ・シャンカルの生演奏を初めて聞いたころ、シタールを演奏しようとして先生を探した。家で練習する楽器は、先生からシタールで調達した。弟子仲間のなかには、インドで楽器を買ってくる者もあられ、弦はどこ製のものか、太さ(ゲージ)は何が適切かなど、楽器の細部に関する情報交換も始まった。ドイツのあるメーカーの弦が、ミインド(チョーキング)奏法の後も音程が崩れず音色もいいといった細々したこと議論されたのだ。結局、自分の楽器を入手したのは、一九八一年初頭にインド周辺へ旅したときだった。あらかじめ、

カルカタのシタール演奏家を紹介してもらい、その方に楽器を選んでもらった。いわゆる「吊し」(既製品)ではあったが、この先生のおかげで比較的安価だが音が良いものが手に入り重宝した。二本目は、留学先の

バナーラスで一九八



ミインド奏法。弦を押さえた指を、アーチ状のフレットに沿って引っ張り音の高さを変える

五年に購入し、今でも演奏している。今は亡き有名な楽器職人にオーダーして作ってもらった。自分の師匠も鼻匠(ひなま)の工房で、師匠にもできあがりを確認してもらい、わたし自身も気に入るように調整してもらった。

楽器職人に良い楽器を作ってもらうには、演奏する側もそれを使いこなせる技能や知識が必要であるし、購入する者に音の善し悪しを判断する能力があることを職人に理解してもらおうことも大事である。そうでなければ足元を見られて、品質に見合わない値段で買う羽目になる。またモノとして演奏者に渡った楽器は保守がかせない。楽器の音質を左右するジャワリーリ(ブリッジ表面の曲面)は、演奏すればするほど弦の振動によりすり減っていく。このため、ブリッジ



シタール (H0278308)

北インド古典(ヒンドゥスターニー)音楽の代表的楽器で弦をはじいて音を出す。起源は明らかではない。遅くとも1930年代までは共鳴弦のないタイプもよく使われたが、その前後に共鳴弦があるタイプに変化して現在に至る。

## イランの弦楽器 サントウール

サントウールは台形の共鳴胴の上にコト状に弦を張りめぐらせた打弦楽器で、イランの場合、標準的なタイプは一八駒七二弦タイプのもので、細いバチを両手に打奏する。音を止める機構はなく、いわば開放弦(指で弦を押さえられていない状態)のみのおよそ三オクターブにわたる音域が、それぞれの余韻が重なり合って響き合うさまは、まさしく「幻想的」だといえよう。

の視覚的になかったよきだった。弦をはじく・弓でこするという奏法ではなく、バチで叩くという奏法——とりわけ、のちに師事したファラーマルズ・パーイヴァルというサントウール奏者の美しく華麗なバチさばきは、共演者のトンバク(イランのワイングラス型片面太鼓)の目にもとまらぬ素早い指さばきと相俟(あいま)ってわたしを完全に虜(とりこ)にした。

顕著である。同形式はパーイエ(原義は「基礎」とよばれる、ロックなどのリフのように何度も繰り返される音型を基礎または伴奏として展開してゆくが、サントウールはとりわけ、バチで叩くというリズム楽器的な特性を活かして、非常に疾走感あふれる動的な音楽が展開されるのだ。近年では、従来の奏法からはなかなかありえない腕使い(バチ使い)をすさまじい速さで演奏するなど、超絶技巧の流れも顕著になってきている。

感じていた魅力は、音色もさることながら、そ

部分」とでもいえよう対比が存在する。「漂い」とは、アーヴァーズとよばれる伸縮

自在で決まった拍の無い音楽形式で、それはベルシャ古典詩の朗唱と限りなく近く、ときに囁(ささや)き、ときに雄弁で堂々とした語りである。サントウールがもつ伸びやかな余韻と、開放弦ならではの豊かな倍音は、こうした語りの間——音と音との間の(一瞬の)静寂をととても意味あるものにしてくれる。

一方「動きの速さ」とは、上記のトンバクとのコンビネーションもそうだが、チャハールメズラフ(四つのばち)の意」というおもにソ口演奏のための速度の速い形式において



上: 超絶技巧をその特徴のひとつとするコンテンポラリー・イラン・サントウールの巨匠アルダヴァーン・カムカール氏の、筆者とのレッスンの様子(テヘラン、2018年)  
下: サントウールを弾く筆者とトンバクを演奏するサイド・ジャラリアン氏の共演(撮影:清水恵、テヘラン、2018年)

サントウール (H0001795)



サントウールのボディやバチは胡桃製が多く、弦は低音が真鍮と銅を合わせたもの、中・高音弦が鋼鉄製の金属弦である。バチの先端下面には、フェルトなどの素材が貼り付けられているのが一般的で、それを用いて弦を打つ打弦楽器である。

谷正人 神戸大学大学院准教授

日本から西に約九〇〇〇キロメートル離れたアジア大陸の西の果てに位置するトルコ共和国。筆者はイスラーム教スンナ派が多くを占めるトルコ共和国において、宗教的にマイノリティーとされるアレヴィー派が儀礼のなかで実践する舞踊について調査をおこなってきた。

アレヴィー派は儀礼のなかで音楽を多用する。伴奏にはサズとよばれる撥弦楽器が使用され、儀礼を遂行する担当者のなかにも音楽家がいる。このサズとよばれる三味線に似た楽器は、トル



イスタンブールの楽器店の天井から下げられたサズ (1998年)

コだけではなくアゼルバイジャンやイランなどにも存在する。似たような形態の楽器は中央アジア、南アジアにも見ることができ、この地がいにアジア大陸各地とつながり文化的に影響を与え合っているかを強く感じさせる。アレヴィー派の音楽家は儀礼の外を一



イスタンブール郊外にあるウンカバヌ楽器街 (1999年)

歩出ると、トルコ民謡形成の一翼を担ってきた吟遊詩人アーシユクとして知られ、儀礼以外でも重要な役割を果たしてきた。

筆者は調査の過程において、アレヴィー派の音楽家にサズを習う機会を得た。彼はイスタンブールのアレヴィー派が多い地区で、筆者が親しくしていた兄家族の家の近くで暮らしており、実際に、数多くあるサズ教室の教師として生計を立てていた。大都会イスタンブール中心部からほど近い場所所がありながら近くには野原が広がり、一夜で作られた小屋のような兄家族の家の一室でおこなわれる即席のサズ教室に、筆者は二カ月の調査期間中毎週未通い、演奏だけでなくイマーム(指導者)・アリーの化身と考えられているサズを床に直接置いてはならないなど、アレ



サズ (H0102920)

サズとは、ペルシャ語で「楽器」という意味で、洋梨を半分にしたような共鳴胴から長い棹が伸びた撥弦楽器(リュート系)。名称は異なるが同様な形態の楽器は広く世界中に分布する。

## 南インドのゴットウヴァアーティヤム

南インドの古典音楽で用いられる楽器のなかに、ゴットウヴァアーティヤムとよばれるめずらしい弦楽器がある。古典音楽の中心地とされるチェンナイでさえ生演奏を聴ける機会はそれほど多くない。ゴットウヴァアーティヤムは四〇〇年ほど前に現在の形になったようだ。ゴットウとよばれる木片を弦の上でスライドさせて旋律を演奏する楽器(ヴァーティヤム)なので、この名がついた。

ゴットウヴァアーティヤムは、南インドを代表す

る弦楽器ヴィナーと外形や大きさがそっくりだが、どちらが先に存在していたか不明である。ヴィナーにつけられている二四のフレットを取り外して作られたのがゴットウヴァアーティヤムであるという説がある一方で、ゴットウヴァアーティヤムにフレットをつけてヴィナーが完成したという正反対の説もある。女神サラスワティーの演奏する楽器として知られ、南インド音楽の王道を歩んで来たヴィナーと比べれば、ゴットウヴァアーティヤムは目立たない存在だ。

この楽器の数少ない演奏



上: 自宅で開いた演奏会でゴットウヴァアーティヤムを弾くブーダール・クリシュナムールティ・シャーストリ(提供: ガーヤトリ・カセバウム)  
下: ゴットウヴァアーティヤムを演奏するガーヤトリさん(2006年)

家の一人であるガーヤトリ・カセバウムさんは、音楽の薫陶を受けたあと、ゴットウヴァアーティヤムを学んだ。彼女が師事したブーダール・クリシュナムールティ・シャーストリ(一八九四—一九七八)は、昔気質な音楽家で人目を引くような派手な演奏や演出を嫌ったそう。音楽界では有名だったが、清貧を好み小さな家で質素な暮らしをしながら音楽一筋の一生を送った。



ゴットウヴァアーティヤム (H0230646)

南インドのヴィナー系撥弦楽器。木片を弦上で移動させることで音を滑らかに変化させる利点があるが、フレットがないため音の高さをコントロールしにくい厄介な楽器である。

寺田 吉孝 民博 学術資源研究開発センター

〇〇してみました世界のフィールド

## 日本で唯一のユニバーサルシアター

飯泉 菜穂子  
民博 人類基礎理論研究部



ユニバーサルシアターを訪れてみました  
森をイメージしたシアター内部。木の装飾の一部は吸音材の役割も果たしている（写真はすべて2018年に撮影）

「障害の有無にかかわらず、映像文化をさまざまな人と共有したい」。そんな思いから筆者は昨年11月にみんぱく映画会「映画が拓く新たなバリアフリーの世界」を実施した。上映会に先立ち、筆者は日本で唯一のユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ（CINEMA Chupki TABATA）」に足を運ぶことにした。

音響設備である7.1ch Dolby Atmos/ DTS:Xに対応している。じつは、森をイメージする装飾の一部は吸音材の役割も果たしているのだという。

### ユニバーサルな映画鑑賞環境とは

一般に、障害の有無にかかわらず何かを楽しんだり実現するよう目指すことを「バリアフリー化」「ユニバーサルデザイン（化）」などと称する。目指すところは同じでも、前者は現在の社会環境にはさまざまな障壁（バリア）があることを前提にそれを取り除くことを目指し、後者はさまざまな事柄のデザイン策定段階から障壁のない環境構築を目指すというニュアンスの違いがある。「シネマ・チュプキ・タバタ」が目指すところは後者である。

視覚に障害のある方に対応した音声ガイド（副音声、外国語映画の場合には字幕読み上げ音声も加わる）、邦画には聴覚に障害のある方の鑑賞を前提とした日本語字幕を常時付与した上映をおこなう。配慮の対象はいわゆる障害をもつ方だけではない。上映時間中に泣いてしまったりおしゃべりしたくなってしまうがちな赤ちゃんや小さな子どもをつれた方を対象とした完全防音の親子鑑賞室も用意されている。

「シネマ・チュプキ・タバタ」の料金表には障害者割引料金が載っていない。障害者サポートを実施しているシアターなのに何故？と一瞬不思議に思ったが、さまざまな障壁を取り除いた上映環境を前提としているシアターだからこそ、敢えて障害者割引を設定していないのだという説明を聞いて、いたく納得した。障害の有無のみを理由とした割引はおこなわない代わりに、移動に困難を伴うために同行支援サービス等を受けている方の介助者分のチケット代は請求しない（ヘルパーパス）、心身の障害がきっかけとなって結果的に就労困難・生活困窮という別の障壁に悩まされている方へは割引料金を設定する（フアイト）といった対応をおこなっているという。

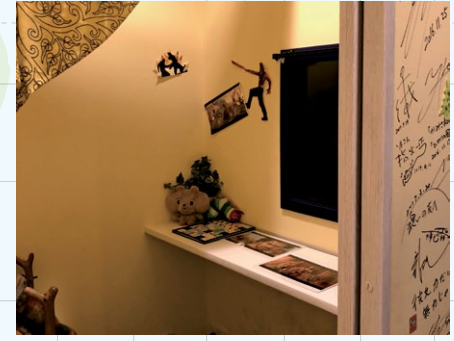
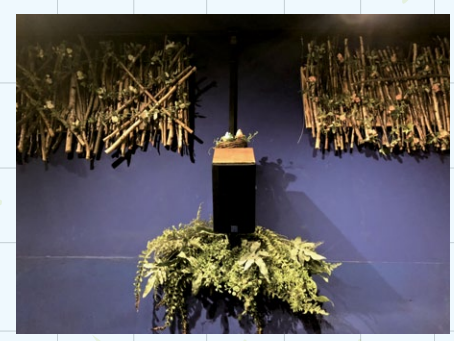


日本、東京

### 視覚障害者サポートから「ユニバーサルシアター」へ

「シネマ・チュプキ・タバタ」は二〇一六年九月にオープンした。JR山手線と京浜東北線の田端駅から徒歩約五分の商店街のなかにある、日本で初めてのユニバーサルシアターである。運営母体は、二〇一〇年から音声ガイドによる視覚障害者の映画鑑賞サポートをいち早く手がけてきた「シティ・ライツ」というボランティア団体。シティ・ライツの名前は、盲目の花売り娘が登場するC・チャップリンの映画「街の灯（City Lights）」に由来する。オープンに至る経緯を当シアターおよびシティ・ライツ代表を務める平塚千穂子氏にうかがったところ、長年の夢であった自分たちの自前の映画館を開館するにあたり、視覚障害者サポートのみならず、さまざまな視点を盛り込んだ「ユニバーサルな」鑑賞環境を目指そうということになったのだそうだ。

「チュプキ」というのはアイヌ語で月や木漏れ日などの「自然の光」を意味する。なるほど、シアターは緑豊かな森をイメージする柔らかな明るい色彩と装飾があふれる居心地の良い空間だ。出発点が視覚に障害をもつ人たちへのサポート活動であっただけあって、音響へのこだわりは本格的だ。北欧製のスピーカーは、リアルなサウンドを再現できる最新の



上：音質にこだわったスピーカーは劇場の前面、側面、後面そして天井にも配置されている  
下：完全防音の親子鑑賞室

### 我が町のミニシアター

動線の確保もユニバーサルな環境には欠かせない。ホームページの案内に従い、田端駅北口改札を出て映画館までの道のりをたどってみた。界隈の地形は比較的高低差があり坂道が多い印象があるが、現地までは駅に隣接するエレベーターを利用すると車いす利用者や移動に困難を抱える人でもアクセスが容易であり、途中で「だれでもトイレ」を利用することも可能だ。映画館開設にこの地を選んだ理由はその辺にもあるのだろうか？と尋ねてみると、思いがけない答えが返ってきた。候補地になった段階で「もちろん、最寄り駅からのアクセスのしやすさや映画館の建築・防火基準を満たしていることも重要な要素でした。でも、じつはいろいろ調べてみたら、この辺りは映画館不毛地帯だということがわかって。それも、この地を選んだ理由のひとつです」と。

音響へのこだわりにしても候補地選定理由にしても、障害のある方たちのために貢献するという福祉的な視点のみならず「良い映画を気持ちの良い環境で映画を愛するいろいろな人たちと一緒に観たい」という、本格的なミニシアターとしての気概があるシアターだ。一映画好きとしても、それがとても頼もしく嬉しい。この新しいチャレンジが継続することを心から応援したいと思う。



上：映画の音を震動で感じられる「抱っこスピーカー」を希望者に貸し出している  
下：全席に搭載されたイヤホンジャックには、左右の音のボリュームを調節できるレバーがある

特別展  
「子ども／おもちゃの博覧会」

明治時代以降における日本の社会の大きな変化は、その時々の子どものありようや人びとの子ども観に影響を与えました。本展では、江戸時代から戦後のさまざまな玩具をつつじ、子どもや子どもをめぐる社会の変遷とその意味を探ります。

会期 3月21日(木)祝～5月28日(火)  
会場 特別展示館



自動車



シーク教徒が演奏する擦弦楽器ターウス

企画展  
「旅する楽器——南アジアの響き」  
南アジアの弦楽器は、中央アジアや西アジアから伝えられた楽器が改良され定着したものが多く、そのいくつかは南アジアでの変容を経て東南アジア、東アジアにも伝えられました。楽器が広大な地域を旅して伝播していく様子を、ユーラシアにおける長期的な文化交流を感得してください。

※要事前申込、参加無料  
※申込締切 2月8日(金)必着  
※本館講堂が改修中のため、館外での開催となります。

ギャラリー公演「ミニコンサート」  
南アジアの弦楽器の演奏をお楽しみください。

時間 13時30分～14時15分、  
15時15分～16時(各日2回公演)  
会場 本館企画展示場出口  
※申込不要、要展示観覧券

3月9日(土)  
演奏 的場裕子  
楽器 ヴィナー  
3月17日(日)  
演奏 伊藤香里、勝田信明  
楽器 サーランギー、マール  
3月30日(土)  
演奏 小日向英俊、藤澤はやん  
楽器 シターール、タプラー

みんなく映画会 第44回ワールドシネマ

「ママのお客」

涙あり笑いありのイラン映画の名作を上映。食卓とおして、イランの人びと、その日常生活や社会を知りたいと思います。

日時 2月23日(土)13時30分～16時30分  
(13時開場)  
会場 ホテル阪急エクスポパーク  
多目的ホール(オービットホール)  
(定員400名)  
※申込不要、参加無料  
※参加券を当日11時から多目的ホール(オービットホール)前受付にて配布  
※本館講堂が改修中のため、館外での開催となります。

点字体験ワークショップ

目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション！点字体験ワークショップを開催します。

日時 2月9日(土)12時～15時30分  
会場 本館エントランスホール  
※申込不要、参加無料  
※みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)による催しです。  
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

「アリラン峠を越えていく」  
——在日コリアンの音楽——

日時 2月9日(土)13時30分～16時  
(13時開場)  
解説 高正子(神戸大学 非常勤講師)  
安聖民(ハンソリ演奏家)  
司会 寺田吉孝(本館教授)

「中国雲南省大理盆地の回族」  
日時 2月17日(日)14時～16時  
(13時30分開場)  
解説 横山廣子(本館名誉教授)  
司会 福岡正太(本館准教授)

みんなくセミナー

日時 2月16日(土)13時30分～15時(13時開場)

会場 本館セミナー室

参加費 無料

※参加券を当日12時30分から本館1階案内所前にて配布  
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内いたします。

第488回

インカ帝国から先住民共同体へ

——植民地期アンデスにおける先住民の集住化——  
講師 齋藤晃(本館教授)

16世紀末、スペイン人は旧インカ帝国で約150万の先住民を基盤目状に区画された1000以上の町に強制移住させました。集住化と呼ばれるこの世界史上希有な社会実験について、最新の研究成果を紹介します。



旧インカ帝国首都クスコに近いピサクの町

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者(話者)

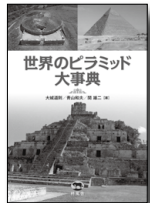
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料」について分かりやすくお話しします。

2月3日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろは  
はじめにヒモありき——人類の線状物利用  
話者 上羽陽子(本館准教授)

刊行物紹介

■大城 道則、青山 和夫、関 雄二 著  
『世界のピラミッド大事典』  
終風舎 15,000円(税別)

ピラミッドの“謎”を解く鍵がここにある。「ピラミッド」とは何なのか。研究分野の異なる3名の著者が、それぞれのフィールドにおけるピラミッドを紹介。わが国のこれまでのピラミッド学の枠を超え、世界中に点在するピラミッドの謎に迫る。項目数約180、掲載図版約430点。



2月17日(日)14時30分～15時 本館ナビひろは  
カフィル・カラ遺跡(ウスベキスタン)における  
ゾロアスター教関連の木彫り板絵の発見  
話者 寺村裕史(本館准教授)

2月24日(日)14時30分～15時15分  
本館ナビひろは、第1収蔵庫前のコーナー  
収蔵庫を窓からのぞいてみよう  
話者 園田直子(本館教授)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)  
ただし、24日(日)は展示観覧券不要

●無料観覧日のお知らせ  
2月24日(日)は、本館展示と企画展を無料で観覧いただけます。

友の会

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)  
※会員無料(会員証提示)、一般500円

3月の友の会講演会は第2土曜日に開催します。

第486回 3月9日(土)13時30分～14時40分  
キリスト教で読み解く韓国の歴史と文化  
講師 太田心平(本館准教授)

日本に仏教を伝えた地域として知られる朝鮮半島。儒教の国としても知られる韓国。しかし、統計をみると、宗教があるという人のうち過半数がキリスト教徒です。どうしてこれほどキリスト教が普及したのでしょうか。それを紐解けば、日本とは大きく異なる韓国の近現代史と、あまり知られざる現在の姿がいつばいです。植民地から軍事独裁へ、民主化運動と格差社会。そして、エネルギーギンギンな若者たちの生き方まで、キリスト教を鍵に考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

第487回 4月6日(土)13時30分～14時40分  
イラン音楽の楽しみ  
——伝統打弦楽器サントゥールを例に——  
講師 谷正人(神戸大学大学院准教授)

東京講演会

第125回 3月9日(土)13時30分～14時40分  
米国先住民ホビの暮らしと世界観

講師 伊藤敦規(本館准教授)  
会場 モンベル御徒町店4Fサロン

米国アリゾナ州のグランドキャニオンの近くに保留地を持つ先住民ホビは、乾燥した土地に暮らす農耕民です。農作物の生長に欠かせない降雨を祈願する儀礼には、超自然的存在力チーナが現れます。動物や植物や自然現象そのものを表し、その存在自体が雨雲の化身とみなされています。民博は力チーナ人形資料を281体収蔵しています。ホビの人びとによる資料解説映像を通して、彼らの暮らしと世界観を紹介します。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。  
※要事前申込先着順(定員60名)  
会員無料(会員証提示)、一般500円

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/ E-mail minpakatomo@senri-f.or.jp





## 想像界の生物相

# 龍に生まれ変わる

のぶ た としひろ  
民博 グローバル現象研究部 信田 敏宏



資料名 | 彫像 (つむじ風の精霊)

標本番号 | H0276395

地域 | マレーシア

サイズ | 高さ 9 cm



資料名 | 彫像 (龍の精霊)

標本番号 | H0000164

地域 | マレーシア

サイズ | 全長 169 cm

これらの彫像は、マレーシアの先住民オラン・アスリの一グループであるマー・ムリの男性が制作したものである。マー・ムリの人びとは首都クアラ・ Lumpur 近郊のカレイ島に暮らしているが、なかでもブンブン村は男性のほとんどが彫像制作にたずさわる村として有名である。彼らの優れた彫刻技術は世界的に知られており、ユネスコから賞を与えられた作家もいる。

### ◆◆オラン・アスリの精霊◆◆

村びとは、「人は亡くなると『果実の島』とよばれる天国のような場所で暮らすようになり、精霊となって現世に生きるわたしたちを見守っている」と信じている。これは、亡くなった人の霊魂がこの世に生まれ変わるといふ輪廻転生の考え方に基づいている。死者の霊魂はサルやフクロウなどの動物や、バッタやクモなどの虫、バナナやカボチャなどの植物として生まれ変わるといふ。つまり、彼らの周囲にあるものはすべて祖先の生まれ変わりなのである。そうした信仰から、彼らはサルを食べるときもバナナを食べるときも、それらを祖先が与えてくれた恩恵として敬い、大切に扱う。

精霊はモヤンとよばれているが、モヤンとは厳密には「祖先」を意味することは

である。モヤンには「モヤン・ブアヤ」(ワニの精霊)、「モヤン・カチャン」(豆の精霊)など、ひとつひとつ名前が付けられており、それぞれ違った役割がある。動植物だけでなく、大嵐などの自然災害についても、モヤンの仕業と考えられている。大嵐が起こると、ふだんは優しい「モヤン・プティン・ブリオン」(つむじ風の精霊、右頁上)が怒って、自分たちに何かを伝えようとしているのだという。

右頁下の写真は、モヤン・ナガとよばれる龍の精霊である。想像上の動物である龍も人の生まれ変わりなのである。龍は、人がその背中を歩けるほど巨大で、ひとたび動けば、大地が揺れ動き、地震が引き起こされると恐れられており、次のような逸話も残っている。村の男性が狩猟のため森に入り、獲物が得られず洞窟で休んでいたときのことである。

頭上から液体が落ちてきて、最初は水かと思っただけ、よく見てみると、赤い血であった。あわてて外に出て振り返ると、洞窟と思っていたのは龍の口のなかであった。びっくりして、その男性は村に逃げ帰ってきたという。

### ◆◆形を変える彫像◆◆

華人の旧正月から一カ月後に設定される「モヤンの日」、村びとは祖先たちの霊(彫像)を祀る儀式をおこなう。儀式のクライマックスでは、民族楽器の演奏が鳴り響くなか、伝統的な歌とともにモヤンの仮面をかぶった男性があらわれ、女性たちが輪になって踊り始める。近年では観光客を招いておこなわれているが、精霊の仮面や彫像はもともとこうした儀式のために使用されるものなのである。

彫像は、マングローブ林に生育する木々を材料としているが、アブラヤシのプランテーションの拡大やゴルフ場開発のため、マングローブ林は年々減少しており、彫像の材料を得るのが難しくなっている。そのため、彫像の大きさは、だんだんと小さくなってきている。



上：彫像制作の作業場(2005年)  
下：「モヤンの日」の儀式(2003年)

# 新世紀ミュージアム

香川県直島は芸術の島として注目されている。この島はそれ自体が作品を展示する場のなかに織り込まれているという。二〇〇四年に開館した地中美術館を訪れ、直島の歴史を振り返りながら芸術と文化活動、そしてミュージアムという場について考えてみた。



瀬戸内海に浮かぶ直島諸島(2011年)

際芸術祭の舞台となる島のひとつとして知られる。ここでは二〇年以上にわたって島全体を文化活動の場とする意欲的な試みがおこなわれてきた。その中核を担ったのは「ベネッセアートサイト直島」というアート活動であり、地中美術館はその象徴的な施設として出発した。

もともと島の経済の中心は大正時代に始まった銅製錬産業であった。足尾銅山や別子銅山などですでに公害が問題となり、離島が銅製錬所の候補地になった情勢のなかでその誘致に名乗りを上げた。直島もまた煙害でほとんどの木が枯れるという公害を経験しながらも、経済発展をもたらした産業を維持してきた。その後、銅の国際価格が下がり、銅製錬産業そのものが低迷する時代を迎え、新しい事業開拓を迫られるにいたった。

一九九〇年に隣の豊島で産業廃棄物の不法投棄問題が発覚した。いわゆる豊島事件である。この問題の調停の結果、一九九八年から直島に総合的な産業廃棄物処

理施設が整備され、重金属を抽出して資源として再生するようになった。豊島の産業廃棄物を受け入れることで、直島も汚染されるという風評が立つなか、島の観光や産業への対策は重要課題であった。

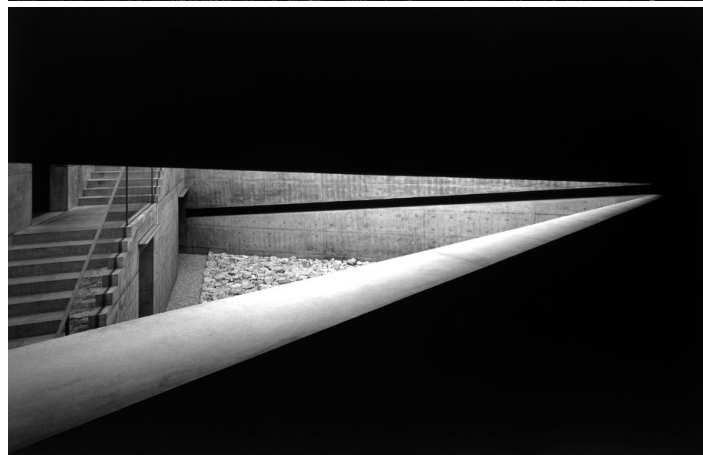
## 島を「美術館」へ

日本では美術館と博物館を区別しているが、欧米の言語ではどちらも同じことばで示される。あえて言い換えれば、美術館は美術品の博物館である。どちらにしても、モノや作品が、作った人や使われていた社会や文化などの脈絡から切り離された異空間に展示される点が共通しているが、その傾向はいわゆる博物館においてより顕著に問題となる。直島を中心とする文化活動は、作品を展示する環境そのもの（建物や島）も芸術的アプローチの対象としている。展示空間を拡大することは革新的であり、それによって文化活動が活性化することは間違いない。また、芸術作品の展示にとどまらず、島の住人が歴史や文化、社会に関心を深めてゆく過程を重視する活動を組み込んでいる点は、今日の博物館が目指そうとしている地域や当事者に密着する展示、そして脈絡を伝える展示に通じるものがある。

さて、船を降りると、浜辺に無造作に置かれた作品が目につく。空や海の色彩たしは自分までもが展示の一部になったかのような感覚にとらわれた。

話題の場所であることを告げずに外国のお客さんを案内したことがある。芸術的な鑑賞を終えたのち、彼らは遠慮がちにこんな疑問をわたしに投げかけた。ここに来るのは特殊な人びとなのだろうか。わたしはそんなことはまったくないし、多分、画一的な特徴などないだろうと答えた。ただ、この質問によって、自分たちが特殊な空間にいるという感覚が顕在化した。

じつところ、人為的に整えられた自然環境とそれに融合するように作られた展示空間からは、芸術に潜んでいるはずの既存の美を破壊するエネルギーを感じなかった。これは、島の産業構造の転換というきわめて泥臭い現実をそれを覆い隠すような芸術というオーラがまとわりついているせいなのか、特殊な展示空間のせいなのか、われわれの消費者としてのふるまいのせいなのか、ざらつとした後味が残った。直島の人びとはどんな思いで「芸術の島」に住んでいるのか、近年の「芸術巡礼者」たちによる盛り上がりやどう見ているのか、なまの声を聞いてみたい。



地中美術館  
撮影：藤塚光政(上)、松岡満男(下) 提供：公益財団法人 福武財団

とも島の風景とも交じり合わないものいわぬ人工色の造形物は、「芸術」という絶対的な存在感を主張している。

一方、地中美術館は自然景観や人びとの生活環境を侵害しないような配慮から、建物の大半が地下に埋設されている。内部は自然光を採り入れる構造で、建物そのものが芸術作品であるようなたまたまとなつている。島それ自体を改造するような建築が、いかに大掛かりな工事であったかは想像を超える。ここに展示される三

人の芸術家のうち二人は当時は活躍中で、展示スペースの設計にも参加したという。作品を展示する空間を作るといふ行為は、芸術家にとってどのような意味をもつのか興味深い。

「特殊」が生み出すもの

美術館の観覧は、日時指定の予約制でおこなわれる。そのせいか、館内にはあまり人気がない。静かにゆったりと作品を鑑賞してもらおうという配慮なのだろう。わ



サーミの歌、ヨイクをめぐる心の旅

川瀬 慈  
 民俗人類学基礎理論研究部

先住民サーミを描いた映画

北欧スウェーデンの先住民サーミの少女が、差別や迫害を受けながらも力強く育っていく姿を描いた映画「サーミの血」が、二〇一六年の東京国際映画祭でいくつかの賞を受賞し、わが国において話題になったことは記憶に新しい。この映画をとおして、サーミとよばれる人びとについてはじめて知った方、興味をもった方も多いのではないだろうか。

サーミはノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアに居住する先住民である。トナカイの遊牧をはじめ、狩猟、漁業などさまざまな生業を営んできた。またサーミは上述の国々において、同化政策やキリスト



サーミのロックバンド、アドヤーガスのメンバー、サラの幼少時代(すべての画像提供: ロッセッラ・ラガツイ)

教化のなかで抑圧されてきたことでも知られている。今回とりあげるのは、その「サーミの血」より少し前、二〇〇七年にイタリア人の人類学者ロッセッラ・ラガツイによって製作された、ノルウェーのサーミの無形文化をテーマとしたドキュメンタリー映画である。

心のよりどころ「ヨイク」

本作の主要なテーマは、サーミの歌ヨイクの継承である。ノルウェーには現在、約四万人のサーミが存在するといわれているが、ノルウェーの歴史のなかで、ヨイクはキリスト教とは相容れない、野蛮な実践として位置づけられ、キリスト教会からは「邪悪な表現」というレッテルを貼られ排除されてきたのである。本作の主人公、ノルウェーの若いサーミであるラウラとサラはヨイクの伝統的な歌唱法を継承すると同時に、ロックミュージックとヨイクの融合を模索するなど、ヨイクの革新に取り組んできた。本作では二人が率いるロックバンド、アドヤーガスのノルウェー本国や英国ツアーでの活動を追いかける。ラウラとサラは、伝統的なサーミのコミュニティ、家族との対話を大切にしつつも、同時にグローバルな音楽産業や視聴者とのつながりのなかでヨイクにあらたなアレンジを加え、歌い継ぐことに試行錯誤する。そのような本作は、ラウラとサ

「受け継ぐ人々」

原題: Firekeepers

2007年/ノルウェー/サーミ語・ノルウェー語・英語/57分

監督: ロッセッラ・ラガツイ

出演: ラウラ・ソンビー、サラ・マリエ・ゴープほか



アドヤーガスによる英国、マンチェスターでのコンサートの様子

ラの葛藤や模索を、人物の心情に迫る繊細なカメラワークで描き出すことに成功しているといえよう。

作品のいたるところに、サーミの人びとがヨイクの特質について自らのことばで説明するシーンが散りばめられているのが印象的だ。「ヨイクとは披露する歌なのではない、それはサーミの身体を支配する存在なのである」「感情が高ぶるなかで、サーミはヨイクを歌わずにはいらなくなる」「ヨイクは必要ときにサーミの肉体に降りてくるのだ」「ヨイクは大地の下に住むものからのサーミへの贈り物だ」「ヨイクをとおして聖なる存在に助けを求めることができる」。これらの語りからは、ヨイクがサーミの豊かな精神世界について理解するうえで重要な役割を果たしていることがわかる。

民族誌映画とアイデンティティ

本作は、商業映画ではないものの、国際的なドキュメンタリー映画祭や人類学系の学術映画祭などで入選、受賞を重ね、高い評価を得てきた。民博においては、二〇一六年一月に開催された上映会「民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より」



アドヤーガスのメンバー、ラウラとサラ

で台湾の原住民作家たちの作品との比較という観点から上映・議論された。上映直後におこなわれたシンポジウムのなかで、ラガツイ監督は、サーミが自らのために本作を使うことはもちろん可能だが、さまざまな葛藤を抱える他の先住民がこの作品をとおして議論し、自らのアイデンティティの認識とその自覚の手助けになることを望んでいる、と述べていた。

伝統と革新のなかで揺れ動きながらも歌い続けるサーミの青年ラウラとサラの旅。二人は今後ヨイクにどのような色どりをあたえていくのであろうか。

## トナカイのロメさん



## What's in a name?

おおいし ゆか  
大石 侑香

民博 学術資源研究開発センター



手を差し出した筆者に近寄るロメ  
(撮影：タチヤーナ・モルダノヴァ、2012年)

西シベリアの森林に暮らすハンティはトナカイ牧畜と漁撈、狩猟採集を営み、日々の糧としている。彼らはトナカイを乳のためではなく、食肉と毛皮利用と橇の牽引のために飼育している。飼育といってもほとんど放し飼いの状態で、夜間は自由に行動させ、一日か数日に一回群れを集める程度である。

二〇一二年の冬、筆者は人里離れた森のなかのあるハンティの家庭に住み込みで調査をしていた。その家庭では約九〇頭のトナカイを所有していた。あるとき家主は、放牧から帰ってきたトナカイ群の一頭に向かって何度かハンティ語で「ロ〜メ〜」「ロ〜メ〜」と大きな声で言い、背中をなで、魚やパンを与えていた。「ロメ」は「静かな」や「おとなしい」という意味である。筆者は最初、家主がその個体をなだめているのだと

思ったが、後で家主に聞いてみると、それはそのトナカイの名前であつた。彼はおとなしい性格をしているためそう名づけたと教えてくれた。それ

まで、筆者には九〇頭のトナカイがすべて同じように見えていたが、そのとき初めて、飼い主は群内の各個体をはつきりと区別していることがわかった。

トナカイの名づけ方はさまざまである。そのトナカイの性格や体の特徴から名づけたり、そのトナカイを所有している人やそのトナカイを調教した人の名前からとってきたり、その仔トナカイの親の名前をそのままつけたりする。しかし、すべてのトナカイに名前をつけるわけではない。親戚に贈与された特別な仔トナカイや橇を引かせるために調教したトナカイ、優秀な種オス、良い仔を産むメスなどにだけ名前をつける。かわつて、肉として利用する、つまり長く生きない去勢オスには名前をつけない。

ロメさんは去勢されたオスのトナカイだが、彼は肉畜とみなされていない。むしろ群れを先導するという重要な役目を担っている。家主は自分の好みのトナカイをただかわいがっていたのではなく、意識的に彼に餌を与えて名前を呼び、自分に馴れさせていた。こうすることで、ロメさんにこの家に来れば餌や必要な塩分がありつけるということを覚えさせ、群れが遠くに行き過ぎないように仕向けていた。広大な土地で自由度の高い放牧をおこなうこの地域では、飼い主によく馴れた先導トナカイが必要だからだ。

このように、一様に見える群れのなかにも人間と親密なトナカイとそうでないトナカイがあり、それは名前のある／なしにもあらわれている。

## 編集後記

今号は企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」と連動した特集である。本展示は本来2018年10月に開催予定であったが、震災の影響で今年の2月21日（木）の開幕となった。『季刊民族学』の方では、関連特集がすでに10月に刊行されているのはそのためである。企画展の実行委員の方々と楽器との個人的かかわりにも踏み込んだ本号と異なり、楽器についてのより詳細な紹介がなされている。関心のある読者は、そちらもあわせてご覧いただきたい。

ところで私事であるが4歳の息子はインターネットの動画サイトで好きな音楽が流れるのを「見る」と（この子には音楽は普通に「見る」ものであることに純粋に驚きを感じる）、映像に合わせて団扇でエアギターをするので、小生は知りもしない手の向きを正したりしている。ご丁寧にどこで見たのか舌を出すことまでである。ロックよりカントリーを聴かせて（もとい「見せて」）いたつもりなのだが……。本企画展で南アジアの本物の楽器を見たとき息子にどんなケミストリーが生まれるのか、今から非常に楽しみにしている。（丹羽典生）

### ●表紙：上から順に

1. コンテンポラリー・イラン・サントゥールの巨匠 アルダヴァーン・カムカール氏（撮影：谷正人、テヘラン、2018年）
2. 女性初の本格的サロッド奏者シャラン・ラーニー（1929～2008）  
[出典：Sharan Rani (1992), *The Divine Sarod*, pp.44 (Plate 25)]
3. インド西部ラージャスターン州の撥弦楽器サーランギー  
（撮影：Daniel M. Neuman, 1989年）

## 次号の予告

特集

## 「子ども／おもちゃの博覧会」（仮）

## みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

### 維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

### ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
（電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00）



## 月刊みんぱく 2019年2月号

第43巻第2号通巻第497号 2019年2月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 丹羽典生（編集長） 寺村裕史 三島禎子

南真木人 山中由里子 吉岡乾

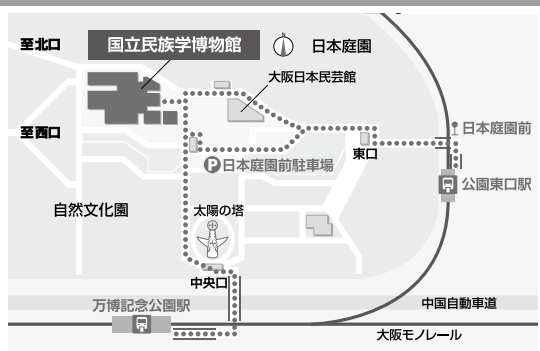
デザイン 宮谷一 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 毎日新聞社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りにください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

# みんなのほくぶつかん **みんぱく**

MINPAKU

## 企画展 **旅する楽器** ——南アジア、弦の響き

会期：2019年2月21日(木)～5月7日(火)  
場所：国立民族学博物館 本館企画展示場

弦楽器の宝庫である南アジア。西アジアや中央アジアから伝えられた弦楽器は、演奏家や職人たちによって改造され、この地に定着しました。本企画展では、さらに形や音を変えながら、東南アジアや東アジアにも伝えられた弦楽器の遙かな旅を、「はじく」「こする」「うつ」という演奏スタイルにわけて紹介します。

『季刊民族学』166号で、本企画展の関連特集が掲載されていますので、あわせてご覧ください。



(提供：Balasaraswati Institute of Performing Arts)



### 『季刊民族学』166号 (2018年10月25日発行) 特集「旅する楽器」

#### 【特集コンテンツ】

南アジア、弦の響き／南アジアの撥弦楽器／インタビュー「タゴール家とインド音楽」／シタールとタンブーラー／サロード誕生の秘密／中央アジアからインドへ 短棹の擦弦リュートの旅／打弦楽器をめぐる試行錯誤／撥弦楽器タンブールの多様な音風景／ポロブドゥールに描かれた弦楽器

国立民族学博物館友の会機関誌

人を知り、世界を知る

## 『季刊民族学』

『季刊民族学』は「国立民族学博物館友の会」の機関誌です。  
友の会にご入会いただければ、定期的にお届けいたします。

『季刊民族学』最新号167号 2019年新春

特集「二つの顔をもつ山——世界遺産・富士山」 A4判、104ページ

【執筆者（掲載順）】

秋道智彌／内山高／堀内眞／小笠原輝／池口仁／竹村功／竹谷鞠負／松島仁／リチャード・ノル／加賀谷真梨



国立民族学博物館友の会

詳細は千里文化財団までお問い合わせください。本誌はお試し購入も可能です。  
電話 06-6877-8893 / 平日 9:00 ~ 17:00  
[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)

